

福島原発事故から10年に想うこと

松永久視子

東日本大震災、そして福島原発事故の当時、私は幼い子どもを育てるお母さんでした。まさか、放射能漏れが起こるとは思わず、戦慄したことを覚えています。あれから10年の日感慨深く迎えるかと思っておりましたが、予想に反して、コロナ騒動のため、集えず、おしゃべりできず、勉強会や集会等も開催できないまま、ひっそりと迎えようとしています。

先日、「大コメ騒動」（監督：本木克英）という映画を観に行ってきました。大正7年、米の価格が天井知らずに上がり続ける中、富山県の貧しい漁村の女性たち・お母さんたちが無力ながらも立ち上がり、集い、抗議しました。いつも女性たちが集まる井戸端で色んなことが共有され、困っている…から、おかしいよね！の声上がり、どんな手を打てば有効かわからない中で一生懸命に考え、思いつくことを片っ端から実行して運動に変えていく女性たち。まさに、井戸端から社会を変えた、日本で最初の女性の市民運動ともいわれる出来事をパワフルな活劇にした作品です。

不覚にも、女性たちが集い、行進し、声を上げる姿に、何度も何度もぼろぼろと涙がこぼれました。あの福島原発事故当時、原発の存在に怒り、想定外という言葉に怒り、政府の対応に怒り、そして、行動していた自分と想いが重なったのだと思います。

放射能がれきの焼却受け入れに反対するために集まって始まった「子どもたちの未来と被ばくを考える会」。一連の活動の中で、同じように不安を抱える方たちとつながり、関東方面から自主避難してこられた方たちとつながることができました。疑問や思いを共有し、何が有効かわからないけれど、とにかく目の前の問題の解決のためにできそうだと思うことは何でもしていこうと活動する中で得たものも多くあったと感じています。

福島原発事故から10年。時の流れとともに、報道が減り、話題に上がらなくなり、今も続く放射能汚染や、福島の帰還困難区域の現実や、原発事故で人生が変わった方たちのことを思うこと、問題意識を感じている人は減ってきていると感じます。でも、放射能は未だに全くアンダーコントロールできていないし、汚染水もフレコンバックも積みあがっているし、廃炉の目途は一向に立っていない。な～んにも終わっていないと感じています。

問題意識を持ち続けたいです。また、発信も続けていきたいです。必要なときには、行動もしていかなくてはと思っています。意識は風化しても、放射能は風化しない。今もまだそこにある危機です。忘れてなるものか、と思っています。

